
竜の風詩 2 外伝 改革伝説梅田

ジェノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の風詩2外伝 改革伝説梅田

【Nコード】

N4634C

【作者名】

ジエノ

【あらすじ】

里親と竜の友情の話ではない。そんな穏やかなもんじゃ決してない。これは、ポイルトップに残ってる様々な問題を解決し、ポイルトップを自分が住み易い様に改造した男の話。

0話 **まずドラゲードの大まかな歴史について学習します（前書き）**

読者の必然条件「竜の風詩2をプレイし、ハッピーエンドでクリアしていること。」

0話 まずドラグードの大まかな歴史について学習します

異世界ドラグード年鑑・年表より

創竜歴781年 全世界で原因不明の病により竜が次々と死亡。

ドラグード政府が「病竜保安協会」を設立。

地球からネットワークを通じて仔竜を育てる「里親」を募集。

802年 竜死病の原因がウイルス等の病原体による物ではなく、巨大建造物・悪魔の樹によるものであることが発覚。

政府は原因となっている「全てを知る者」との交渉を計るが、失敗。

816年 無事保護された仔竜達は「翡翠の使者」となり数多くの竜死病に感染した竜を救い出す。

ドラグードと地球を繋いでいたホームページが閉鎖となる。

その後、通信媒体だけの移転が決定する。

その後、ドラグードに平和が訪れるとだれもが思っていた。しかし、予想は外れていた。

830年 地球とドラグードを行き来する「改革者」出現。

改革者

1話・住処を探そう。

前編（前書き）

中途半端です。

1話・住処を探そう。 前編

港町ポイルトップ 竜舎

「」

獣人の男が楽しそうに掃除をしている。

彼の名はニエル。

この竜舎で竜の世話をしながら、里親の補佐役としても活躍している。

病竜保護協構成員及び第2級里親補佐官及び1級仔竜保護管。

歌が得意で冴えた嗅覚は様々な分野で活躍する。

彼は、誰よりも仔竜の事を愛していた。そして、誰よりも仔竜の気持ちかを理解できている存在だった。

と、その時。

「!?!」

何かこう、得体の知れない感覚が彼を襲った。
しばし考える。

しかし、その長考も仔竜の呼び声がかき消される。

「ニエルサ〜ン早く来てほしいデシ」

「はい、今行きますよw」

と、陽気に仔竜の元へ。

しかしやはり、

「(何だったんっすかね…あの寒気…?)」

ウリア砂漠地帯 位置不明

そこにあるのは、この世界に存在しないはずの発明品、大型の単車1台。

滑車付きの大きなスーツケース5個。

そして、ヘルメットを被った長身の男。

実に怪しい。

ヘルメットに眼鏡、白と灰色を基調とした迷彩柄の長ズボン。

上半身は「猛毒士」と書かれた黒いTシャツ。

背中に酸素ボンベを背負っている。海に潜るつもりではないようだが。

左腕には蠍のタトゥー。ちなみに湿気で貼るシールタイプの奴。

背中に担いでいるのは、大型のマシンガンと黒いギターケース。腰に日本刀とその他刃物数本。更に起動中で変な装置の繋がれたノートパソコン。

ポケットには10個入りキャラメル5箱と弾丸入りカートリッジ数個。

実に物騒だ。

こんな格好は秋葉原以外の日本でするべきではない。

するなら秋葉原かアメリカだろう。

いや、秋葉原でも本物の刃物を携帯しているコスプレイヤーは居ないだろうが。(つーか捕まる。)

「さあああああてっ！

何年ぶりでしょうか！この感動、この感覚、この空気！

いやいやいや、もう何でしょう、ゲームに夢中になってレベル上げまくった学生時代が懐かしいわけですよ」

男は何やら1人で勝手に話を進めている。

「んでね……この世界ね……変えようかね……思っんですよね……
……異世界ドラグードをね……」

いちいち文節が解るように喋ってるよコイツ。
ってかどえらいこと言い出したな。

「……さてと、そんな訳だからこれから数ヶ月から数年程、ドラグー
ドと地球を行き来していかにやらなんわけで……」

うん

地獄やね！

スケジュール的に

さあてと、まずは寢床に電力、それから飯の確保だな。
つてかとりあえず別の場所に移ろう。砂漠暑い」

そして男は、空に向かって誰かを呼んだ。

「死恋ー！御前どつか良い場所知らないかー？」
その叫びと同時に、男の真上に巨大な竜が現れた。漆黒の鱗に血の
ような赤い斑点を持ち、他の竜よりも細長い体型であるそれはまるで毒蛇のようだった。

解説をしておくのが良いだろう。

この男、梅田苜徒。

現在20歳の大学生で、小6当初から竜の風詩2をプレイし、その魅力に魅せられていた。

その頃はまだ、異世界ドラグードの存在を「架空」としか考えていた為、その実態に気づく事はなかった。

ドラグードは実在する。

その事を知ったのは、丁度高校2年生の頃。

最初は信じ難かったが、ニエル氏や仔竜がプログラムに無い台詞を吐き始めたり、世界各地で多発する怪現象の発生により、徐々にその存在を信じ始める。

そして、ノートパソコンを独学で改造、数回の実験の末、ドラグードと地球を自由自在に行き来する能力を得たのであった。
まあ、その事は追々話すから気にするな。

竜 死恋の先導で梅田は、様々な場所に単車を走らせた。

冒

険

機

能

使

い

候補一・街の雑木林

解説：冒険機能で移動可能。

探索後、植物に憑依した竜「マンドレイク」との戦闘開始。
戦闘に勝利すれば契約加護印「マンドレイク」入手。

+箇所：気温・湿度が温帯並で快適。

-箇所：害虫の被害が多い。

「」

「…梅田、どうだ此処は？」

「ああ。良いつて言えば良いだろうよ。
だがな、1つ欠点がある。」

「何だ…？」

「蚊だ。」

「珂蛇？」

「蚊だ。蚊が多いんだよ此処！
竜の鱗つてのはそう、蚊の口吻なんて通すわきゃねーけど、俺は人間だ！」

人間の皮膚には鱗がねーの！

大体さ、此処来る前は竜の病気ばつか気にしてたけど、やっぱり地球にない病原体とか多い可能性高いべ？

俺死ぬかもしれへんやないか！

へだば次さ行くべ！」

方言が…

「そうか…？」

「そうさ！だからもつと蚊の少ない場所にしてくれ。」

「解った。」

死恋は飛び立ち、梅田は単車を出す。

そ　ん　な　わ

け

で

候補二・カザリナ山、幸いの地フツフル

解説：冒険機能で移動可能。

抗生薬とナーガ草を所持していれば契約加護印「シヨコラフツフル」入手。

+箇所：とりあえず蚊は居ない。

-箇所：高い。

「どうだ梅田、此処なら蚊は居ない。」

「有難う…だがな、此処結構高いぞ…。」

見てみ、地球の菓子で何時ぞやお前が食いたいって言った「ポテイトチイプス」の袋がこんな状態だ…」

梅田が突き出したのは地球で有名なスナック菓子「ポテイトチイプス」の袋。

風船のように膨れ上がっている。

読者諸君は「気圧」というものをご存知だろうか？

気圧とは、^{きあつ}気体の圧力のことである。単に「気圧」と言う場合は、

一 大気圧（大気の圧力）のことを指す場合が多い。

気体の圧力は、混合気体の場合、一構成している気体のそれぞれの

圧力（分圧）の合計となる。

空気も物質であるため質量があり、地球をおおっている大気の層によつて海面では面積 1 cm^2 あたり約 1 kg ほどの圧力がかかる。大体水銀柱で約 76 cm に相当するらしい。

これを大気圧または単に気圧という。高所ほど、その上方にある空気柱の高さが低くなるので、気圧は低くなる。海面での大気圧を1とする圧力の単位としても用いられる。

海上の水蒸気蒸発によつて上昇気流が発生する箇所の空気の密度がやや下がり、気圧がやや低くなるなど、同じ海拔高度でも、少しずつ気圧は異なり、気圧の高低は常に変化する。この気圧の山や谷を高気圧、低気圧と呼ぶ。気圧の差が生じると高気圧の空気が低気圧の領域に流れ込む。これが風のおもな要因になっている。気象情報では、気圧の単位はかつてはCGS単位系の^{ミリバル}mb、さらに以前には^{国際単位系}ミリメートルが使われていたが、現在は^{ヘクトパスカル}SIのhPaが使用されている。

カザリナ山は標高が恐ろしく高い。つまり気圧も非常に低い。

地上では、袋内と袋外の気圧が等しいため、袋は普通の膨らみを見せる。

しかし、袋外の気圧が低くなると、袋内の気圧は袋外の気圧に基準を合わせようとする。

その為、袋は膨らんでしまうのである。

「でも梅田ならそれぐらいの事気にせずに行き」「出来ねえよ！袋がかさばるだろうが！」

というわけで却下。

◦ < 続 に 話 次

1話・住処を探そう。

前編（後書き）

続きはまた、次の話で。

2話・住処を探そう。後編(前書き)

短いですよ。でも続きます。

2話・住処を探そう。後編

候補3・魔獣の森

解説：冒険機能で移動可能。

精霊根5つ以上所持していて、契約加護印「ゾンドレイク」を使用中の場合、契約加護印「Dragon Head Back」入手。

+点：落ち着く。

-点：怖い。

「いい所だ。

なあ死恋、そう思わないか？」

随分と心地良さそうに珈琲片手に寛ぐ梅田。
しかし死恋はというと、

「…何処がだ？」

震えていた。

「いや、オーラが」

「落ち着かねーだろ…此処」

「そうか？」

「そつだよ！」

梅田の性格が特殊とはいえ、ここまでとは思わなかった死恋であっ

た。

そ

ん

な

わ

け

で

さ

あ

候補4・飛竜保護区ドラゴンバレー

解説：冒険機能で移動可能。

俗に言う「スネークゲーム」に勝利すると契約加護印「ママルバーン」入手。

二度目以降の勝利では、アイテム「光りキノコ」か「幻の秘石」どちらかを入手。

地属性挑戦者にお勧め。

+点：景色最高。

-点：落ちたら死ぬ。

「さて、ドラゴンバレーだが」

「また気圧？」

死恋は思っていた。

梅田の事だ、また菓子袋がどうだこうだと言い出すのだろうと。しかし、当人は。

「いや、その点に関しては袋に穴を開けておけばいいことに気がついたから安心しろ」

「あ、そーですかい…」

突っ込む気も失せた死恋。
と、そこに何者かが飛んでくる。

「おーいッ！君達イ〜！」

無邪気な声で羽ばたいてくるのはママルバーン。
この山地に住む「飛竜」である。

「あ、ママルさん、お久しぶりです。
相変わらずですか？」

死恋も嘗てゲームで対戦した仲であり、慕っていたママルバーンに再開できたことがうれしかったのだろう。かなり喜んでいる。

「あ、死恋くんじゃない？」

君こそ元気だった〜？」

「いやいや、こっちも変わりないですよ。」

あ、紹介が遅れました。

俺の里親の梅田です」

と、梅田を紹介する死恋。

「ママルバーン君初めまして、保安官のロバートです」
と、梅田。

その瞬間、

ズコ！

その場に居た全員がコケた。

その後の話し合いの結果、ここには本来飛竜及び保護区管理スタッフ以外来る事が許されない場所であることがわかった。

理不尽かもしれないが、密猟者による被害や外来種による生態系崩壊を回避する目的で定められた法律であることを知り、梅田も今は引き下がった。

梅田と死恋がその場を去った直後、他の飛竜や管理官の安堵の声が聞こえてきた。

どうやらママルバーンこそよかったものの、彼以外の飛竜やスタッフにとつて、梅田の装備していた大量の刃物や見慣れない武器、巨大で今まで見覚えの無い単車は彼と死恋が実質ヤクザや犯罪者のような存在であるというイメージを植えつけてしまったらしい。

そ れ は 仕 方 無 い と し て

その後も、契約加護印を入手できる密林「トピリアの森」では主である精霊トピリアに恐れられ怪我をして断念。

目立たない「忘れ去られし古城」では主である吸血雌竜ヴァンパネラから死恋を守るため彼女を膾炙りにして、何か気分が悪いので断念。

契約加護印「ジン」を装備している場合のみ行ける「サラ平原」ではまた主である管狐をとつさに切り伏せてなんかまた気分悪いので断念。

その他の場所は大抵距離や住民との付き合いの問題から断念となった。

で、最終的にこのよ

最終候補・滅びの都ヒディール

解説：「忌地への道標」を入手後に冒険機能で移動可能。

1度目は世界の真実を知る学者との会話イベント。

2度目は「ニステアの滴」を持っていけばイベント進行。

3度目は「水晶ランタン」を持っていけばイベント進行。

4度目はラスボス「シュブニグラス」との戦闘。勝利してゲームクリアって要領である。

梅田と死恋は早速其処にある建物に入ることにした。

「チャースミカワヤです」

「同じくみかわやです」

今の梅田にとってヒディールとは、扉は自動ドアなのでほぼ簡単に開くし、電力供給も他より行える上に回線状況も良好。

これほど良い場所は無いと考えていた。

と、その声に気付いたのかここにすんでいるヒディール人学者「ケイ・グラント」氏があわてて登場。

と、此処まで引つ張っておいてなんだがこの続きはまた3話で。

2話・住処を探そう。後編（後書き）

注：学者の名前は「仮」です。

第3話「計画についてなんだけどさ」

世間に隠してきた自分の研究所。

竜死病の完全治療法を見付ける為に、男が必死に研究を続けてきた施設。

其処に現れたのは、如何にも物騒な格好をした男と竜だった。

「何なんだ君達は？」

「俺達かい？」

と、死恋。

「俺達はなあ…」

『世界ハンバーガー早積みクラブ』だ！」

と、梅田。

無論そんなもんじゃない。

当然偽証…というかボケである。

が、しかし。

「んなつ…『世界ハンバーガー早積みクラブ』って…」
信じ込んでしまっているケイ。

と、其処に梅田。

「と言う嘘に対して…」「コルアアアアア！」

死恋とケイは、なぜか初対面でいきなり心が通じ合った。

— 後 分 数 —

「んまあ、そういうわけだから力を貸してほしいわけだ」
「ああ。結論としてはそうなるな」

すっかり事情を説明し切った1人1体。
それを適当に聞いていたケイ教授。
とうぜんこんな無茶苦茶で荒唐無稽なミスレンジンドH・S・的計
画に真っ向から賛成する筈も無い。
「いや、改革って…具体的に何をするのかな？」

「ああ、それに関してはな…」
と、何かを用意する梅田。
「スライドとか電源借りるよー」
と、許可無く動く死恋。

カチッ

ヴーン
ピーッ
ププッ

精密機械系統の音が鳴り響く。

そうしてスライドに映し出されたのは「ドラグード改革計画DX完全スケジュール表」と、タイトルに出された大きくカラフルなスケジュール表のようなもの。

更に「超隊長」と書かれた腕章を装着した梅田の姿。

次いで可愛らしく猫のように座った死恋の姿。

ケイは思った。

今年は何年だ…

「はい、それではこれから『ドラグード改革計画デジタルクロス』略して『D・K・K・DX』の完全レクチャーを開始します」

「イエー！ホラ、お前も拍手」

「イ…イエ〜」

ノリノリな死恋と脱力気味のケイ。

「まず、6/3。

この日に俺がドラグードへ降り立つ準備を始めました。

そして次の7/3、ドラグードに無事到着。

更にそれから1週間、住居を探し続け、最終候補であった此処ヒディールへと到着。

どうせ部屋余ってるんだし良いだろうと言う事で次の日、ヒディールに住居を構える作業を開始。

次の3週間で神獣四体とケツアルコアトルの能力を借りたいと思っております。

更に2週間でポイルトップに支部を設け、支援者を募集します。

はい、此処までで何か質問は？」

すいません。質問云々以前に色々突っ込み所有りまくりなんですが、でもきつと突っ込んだら殴られると思うので突っ込まない。

「…じゃあ早速質問するけど、最初の三週間で神獣や神獣王ケツアルコアトルに能力を借りる必要性は？」

「いや、必要性というか交渉して許可取らないと駄目かと思いましたがー」

「いや別に要らないだろ？」

突っ込むケイ。

「いや、気分的に。」

ベトプリニス様は死恋が嫌だって言うから諦めたんだけどさ」

いや、死恋が嫌って言うか普通に作者の都合ですけどね。() ベトプリニス倒せてない。

「ふーん」

作者の友人風に答えるケイ。

「まあ、後は教育制度引つ掻き回したりレギオンぶっ殺したり「全てを知るもの」の集団もまとめてぶっ殺したり（チェーンソーあたりで）悪魔の樹も修理したいし」
さり気無く凄まじい事を言う梅田。

「「適当だな」」

死恋とケイ、また心が会う。

で、そのいう訳だから

「部屋余ってるから適当に使ってよ。

その代わり色々日常的に手伝ってもらっから宜しく」

「有難うな、教授。」

ちなみに俺、梅田葦徒。んでこいつは死恋」

「凄い名前だね。大学生？」

「オオヨ」

「どうやってこっち来たの？」

「ああ、それについてはな…」

話は大輪の花が咲いたところで、今回はこれまで。

第3話「計画についてなんだけどさ」(後書き)

改革者、問題起せど、家得たり 作者

第4話・宣伝しよう〜そうしよう〜

芦徒と死恋はケイを研究所に残し、港街のポイルトップへと向かっていた。

「MANY LOVER その手に VERY LOVER

俺等の青春が VERY LOVER

兄貴ウルフ愛だサア〜イン」

「MANY LOVER その手に VERY LOVER

彼女の青春も VERY LOVER

姉貴キャッツ愛だサア〜イン」

ヴァーヴァヴァーヴァーヴァーヴァーヴァーヴァーヴァーヴァー…なんて歌を口ずさんでいるのは、我らが梅田と死恋である。

30分後・ポイルトップ役所

「…というわけで、ウチの団体を宣伝させてくれちゅう話なんですよ。

ええ。何も怪しい企業や集団ちゃうんですって。」

「ペエ〜ロオ〜！ペペエ〜ロツ！ペペロ、ペペロペロペロ〜ペツ！」

（そうですよー！彼の言う通りです！俺達、大真面目なんですから！）

関西弁になって必死に受け付けを説得する梅田。

ペロ語で更に説得する死恋。

「いや、ですからねえ…今所長に連絡取ってるんですけど見付からなくて…」。

ですから今日の所は帰って頂きたいと…」

必死に訴える受付員に梅田は、

「フーか、アンタがこの場で許可くれたってもう俺等は帰って勝手に宣伝しますけどねえ。なあ死恋？」

「全くですよ。貴方が軽く口約束程度で言ってくればもうそれでもう何かいい気がしてまして…」

それじゃあいけねーだろって感じたが、それだけ一人一頭はこの場で時間を消費していられたのだ。

「私もそうしたいんですが」

「マルコスさんは黙ってて下さいッ！この方々は僕が追い返しますから」

突如別の受付員が現れる。どう見てもキャラのウザそうな奴だ。

「（うわー…採取中のランゴビートよりウゼーの来た…）」

「それで？貴方は具体的にどういった団体なんですか？」

「あー。アレですよ。竜特有の病気や心の病について研究していたりするものと思われまます」

梅田の答えは非常に曖昧であった。どう見てもこの場をやり過ぎるうとしているとしか思えない。

「はあ？ふざけるのも大概にして下さい。

貴方どう見ても医師免許とか持ってませんよね？医療関係者なわけないですよね？

その服装、担いである武器や不思議な楽器。着こなしたってそうです。

髪型や顔つきとか喋り方も。どう見たって医者をやっている叔父とは全てが異なりますから」

全く馬鹿だ。

小学生か御前は。

その発言…というより存在自体つまないから帰ってきてくれて良いよ。

梅田は思った。

「（この坊主、途轍もないバカだ。余りにも一般社会というものをナメている。

一介の市役所職員の特メエが何で見た目だけでそいつが医療関係者かそうでないかが判るんだよ？

服装や髪型とか関係ねえだろうが、ボケ。若手の医者には結構ラフな奴とか居るだろ。

大体ギターが何だよ。趣味でメタルやってるから休日は何時も担いでるだけだつーの！

顔つきや喋り方への突っ込みなんぞ論外だしよ。つか、テメーの叔父がどうか知らねえつての！

全てが異なる？当然だろうが。寧ろ職業同じってだけで何もかも瓜二つだったら怖えし気味悪いわ！

俺がそんな世界の住民だったら間違いないくその世界を壊すぜ。大体よお（「

死恋も思った。

「（役所とか税務署って何処も馬鹿しか居ないんかよ。

御前は神か？ヤハウエか？オーディンか？ゼウスか？釈迦か？違うだろ、馬鹿。判ったような口効くな。大体さあ（「

「（病気の研究ってだけで何も医者だ薬剤師だとは一言も言っ
てねえよ、禿げ（「

彼等が黙り込んだのに気づいた受付は調子に乗ったのか、
「っはw

見なさい！黙り込むと言うことは僕の言う通りでしょう。
まあそれもそのはずです。

何たって僕は病童保護協会と友好関係にあるかの有名な偉大なるフ
ェント金融の1人息子、アプロス・フェントなんですから。
貴方方のような下等凡人とは格が違いすぎますよ。

さあさあ、判つたなら帰ってください！下等凡人の方々はねッ！」

アプロス・フェントの無価値な講釈を聞いても、1人1頭は沈黙を
保ち、動かなかった。

既に怒りが込み上げてきていたのだ。周囲で待っている者の中にも、
アプロスの発言から気を悪くしている者が多く居る。

例えば先程の受付の青年・マルコスはアプロスに対して鋭い視線を
向けている。梅田の前では只管腰が低かったのに。

例えば待合席で本を読んでいた竜人族の老人。彼は傘を振り回して
アプロスを殺す予行演習をし始めている。

例えば待合席に静かに座っている獣人族の夫婦。妻が右手で何かを
握り潰すような動作を繰り返し、夫は石の床で爪を丹念に研いでい
る。

例えばさっきまでそこら辺で遊んでいた子供達。何れも玩具の武器
を構えて今にもアプロスに飛び掛ろうとしている。

更に梅田達も思っていた。コイツは殺したいが、此処で殺してしま
っては自分達の苦勞が無駄になってしまう。

それだけは絶対に避けなければ。しかしこのままでは自分の腹の虫
という蟲が収まらない。

覚悟を決めて梅田は機関銃を、死恋は鋭い爪の生えた強靱な両腕をそれぞれ構えようとした。

と、その時。

「フエントよお……ちよいコツチ来いや。
話があるんだわ……」

大柄な竜人族の男が、アプロスの頭を鷲掴みにして奥へと引き摺って行く。アプロスは既にその顔を見た瞬間気絶した。

彼の名はバステイ・メローネ。主に肉体労働を担当する人気職員だ。

1分後「あアツ」「イヤーン」「止めてえ」等の気色悪い悲鳴が部屋の奥から響いてきた。

そして、何かの破裂するような音が聞こえ、その悲鳴は止んだ。

全裸で性別の判らない状態にされたアプロスの醜態を写した写真が町中にバラ撒かれ、フエント金融の社員は総辞職。

全てを失った社長が自殺してフエント金融という企業が歴史から抹消されたのは、僅か20分後の事だった。

その後、梅田と死恋はバステイ&メローネ家一同という新しい友達を手に入れ、協力を募る宣伝活動を大形単車と飛竜による地上・上空からの派手なパレードで果たす。

数日後・ポイルトツプ市役所にて

「よう、アシト！シレン！」

「おおくバステイ！」

「相変わらず元気そうだなあ！」

1人1頭は再び市役所にいた。

自分達の計画の志願者が、どれだけ集まったかを調べるために。

第4話・宣伝しよう〜そうしよう〜(後書き)

続きはまた次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4634c/>

竜の風詩 2 外伝 改革伝説梅田

2010年12月30日02時44分発行